

関係なさそうなことを繋げる「教養のある人」

江口 創紀

教養のある人かどうか、ある個人が「あの人は教養のある人だ」と認識する場合を考えてみる。

自分が他人をどのように認識するかを考えるにあたり、先に友達について考えてみる。ある人について、その人が自分の友達かどうかはどう判断するだろうか。恋人ではないので「好きです。付き合ってください」という告白はないし、友達であるかどうかは主観的判断になってしまう。2人の関係性を表す言葉ながら、お互いの思い込みが違う場合がある。そのため、自分がどのように人を認識するか考えるため、友達を例に取り上げる。

人間関係を表す言葉は、友達、知り合い、ファン、家族、先輩などさまざまな種類がある。あるグループ（たとえば、サークル活動、会社）内での人間関係ならば、同期、先輩といった言葉を使って表す。家庭内や親族であれば家族、親、兄弟といった言葉を使う。血縁関係を表す言葉なら、その人について話すとき、「私の父は会社員だ」「私の妹は勉強をしている」というように、血縁関係を表す言葉をそのまま使う。では、社会における人間関係を表す言葉の場合はどうだろうか。会社内の人では、上司や同僚といった言葉を使う。社長、課長といった役職名で表すこともある。仕事中はそれでいいし、仕事外でも、仕事のことに关する話ならそれで問題にならないだろう。しかし、日本に多いメンバーシップ型雇用では、社員同士で飲み会をすることがある。社内結婚もある。大学のサークルでも、サークル員とサークル活動でもないプライベートで会うことがある。こういった場面ではどうだろうか。知り合った場が会社やサークルであるから、同僚、後輩といった言葉で表しても客観的事実に反してはいない。とはいえ、プライベートで会うことを、会社やサークルで知り合った人ならだれでもするだろうか。する関係の人としない関係の人がいるだろう。この2つを区別するとき、友達か、友達でない客観的事実に基づく人間関係を表す言葉でしか区別できなくなる。ここまで迫られて初めて「友達」だと確信をもって認識できる。このように、個人的に「あの人は教養のある人だ」と区別されるのはどういう場合なのか、考えてみる。

教養のある人は、ない人なら話題にしないようなことを話題にし、問題提起する。教養のない人なら関連づけないようなことを関連づける。これがイノベーシ

ョンにつながる。イノベーションは技術革新と訳されることが多いが、科学技術の発展とは限らない。すでにある繋がりを解体し、別の繋がりを作ることもイノベーションの一つである。それが新たな製品や仕組みの発明になる。

新たな領域の学問が生み出されることもある。たとえば、和歌山大学には観光学部があるが、観光学というのはこれまでになかった学問分野である。しかし、観光学の中身を見てみると、経済学、経営学、地理学、情報学、文化学、語学など、すでにあるさまざまな学問である。それらを体系的に組み合わせて、観光学という学問になっている。グリーンツーリズムのことも考えると、農学の一部を観光学に取り入れることができる。星空観光では天文学の知識も必要だ。

経済学部には「地域経済演習」という演習がある。2020年度は有田川町でみかんの産地にお邪魔し、みかん農家の現状をお伺いした上で、みかんとグリーンツーリズムについて考えた。無農薬や省農薬でみかんを栽培する農家さんのお話の途中で、「オーガニック」「クローバー」「窒素固定」といった言葉が登場した。

中世ヨーロッパでは、三圃式農業が行われていた。耕地を3分割し、秋まき作物（小麦・ライ麦）、春まき作物（エン麦・大麦）、休耕地の順で1年毎に輪作する。10世紀ごろから始まり、長らく続いていたのだが、18世紀のイギリスで、これに革命をもたらしたのがノーフォーク農法（四圃式）だった。農地を4分割し、1年毎に、小麦、かぶ、大麦、クローバーの順で植え、4年で1周する四輪作である。かぶを家畜の飼料にすることで、現在の混合農業につながっていくのだが、今回注目するのは、休耕地をなくしてクローバーを植えている点である。クローバーはマメ科の植物で、根に根粒菌を共生させ、空気中の窒素をアンモニウムイオンに変化させ地中に取り入れることができる（窒素固定）。このおかげで、休耕しなくても土壤に窒素化合物をもたらす、植物が核酸やタンパク質などの有機窒素化合物を合成できるのである。

この話をするには世界史と生物の両方の知識が必要で、容易いことではない。経済の専門ばかり勉強しては気づかない。教養は大海原の如くすべてつながっている。ある事柄に詳しい人を専門家と言うが、別々のことをつなげられる人はそうではない。「教養のある人」と言わずして、何と表現するだろうか。教養のある人は、一見関係なさそうなことをつなげられる人である。